# チェインソーの評価法(Ⅱ)

- 防振性能について(1) -

後藤純一•後 秀樹•瀧本義彦

A Method for Evaluation of Chain Saw ( ]] )

— On the Performance of Anti-vibration(1) —

Junichi Gotou, Hideki Ushiro and Yoshihiko Takimoto

## 要 旨

近年,チェインソーの振動対策としてエンジンの改良・開発がなされてきたが,その振動を評 価する術を我々は持っていない。今回はエンジンより発生する振動起源力,防振構造の特性,ハ ンドル把持部の振動加速度値よりチェインソーの振動についての物理的評価法を組み立てるため の研究を行ない,あわせて防振構造の改良点を示した。

西ドイツ・S社の一機種について4台のチェインソーを金属製脚立より弾性抵抗係数(0.185 kg/cm)のパネを介して吊り,前後ハンドル把持部の振動を測定した。この測定値を本体,ハンドルそれぞれの重心変位,重心まわりの2つづつの回転角を変数とする6自由度系の振動モデルを用いて解析した。

今回の研究を通して得られた結論は、まずある程度、この振動モデルによって防振構造の特性 を表現できたが、防振材の特性の吟味が不十分なためか、測定値の説明等が完全に行なえなかっ た。一方、評価法の吟味の中から防振構造の改良点として、ハンドルの重心まわりの回転角によ って、ハンドル把持部の防振性を向上できる事が推測された。

### Iはじめに

これまでにチェインソーの物理的評価法として示した事は,第88回日林大会で,実測した加速 度値,振動力よりチェインソーを 2自由度系の振動 モデルにシュミレートし, これを解析した 事,第89回日林大会で, Hammering Test によって得た粘弾性抵抗係数を用いて数機種のチェ インソーの防振構造を前述の2自由度系の振動モデルを通じて評価した事,またあわせて防振ハ ンドルの改良の方向性を示した事である。

これらの報告を通して得られた結論は、防振構造の改良点としては、まず、ハンドルと防振材に よる固有振動数の低下によって使用回転数域でより大きな減衰を得るために、ハンドルの重量を できるだけ重くし、本体の重量をできるだけ軽くする事、同様に、防振材の粘弾性抵抗係数をで きるだけ小さくする事によってより大きな減衰が得られる様にする事、さらに、左右方向の防振 材の配置が圧縮型になっているため、せん断型に配置されている上下、前後方向に比較して防振 性能が悪くなっているので防振材を改良する事の3点であった。一方,これらの報告を通して, 今後の課題として残ったものは,防振材の特性は実作業上どの様な制約を受けるか,ハンドル, 本体の振動のふるまいをそれぞれの重心変位から取り扱ったが,それで十分なのか,防振材の配 置はどうあるべきなのか,等であった。

今回は,以上の成果をもとに,後述の2つの課題を解明するために,西ドィッ・S社製の同一 機種のチェインソー4台についてそれぞれの前,後ハンドル把持部付近の振動加速度値を測定し た。防振材の配置を考慮した上で,ハンドル,本体の重心まわりの回転角と重心変位とからチェ インソーの振動のふるまいを各振動方向について6自由度系の振動モデルにシュミレートし解析 し,測定結果と比較検討した。

Ⅱ 解 析 手 法

前回は、上下、前後、左右の3方向毎にチェインソーの振動測定状態をハンドル、本体のそれ ぞれの重心変位による2自由度の振動モデルにシュミレートし解析した。今回は、同様に3方向 毎に、ハンドル、本体各々の重心変位と各々の重心変位方向と直交し、重心を含む2軸まわりの 回転角を加え、ハンドル、本体とで6自由度を持つ振動系にチェインソーの振動測定状態をシュ ミレートし、解析した。

(i) 振動モデルとその運動方程式

図-1にこの6自由度系の振動モデルを示し、以下の理論式に用いる変数と係数を定義した。 これらより Lagrange の方程式を用いて、このモデルの運動方程式を導くと、次の様になる。

運動エネルギー  

$$T = \frac{1}{2} M_1 \dot{Z}_1^2 + \frac{1}{2} I_{x_1} \dot{\varphi}^2 + \frac{1}{2} I_{y_1} \dot{\varphi}^2 + \frac{1}{2} M_2 \dot{Z}_2^2 + \frac{1}{2} I_{x_2} \dot{\theta}^2 + \frac{1}{2} I_{y_2} \dot{\eta}^2$$

$$(R存 x \wedge \nu \neq - (B 振 材 \oplus \mathcal{O} \oplus \mathcal{O}$$

一般力(本体重心に $Z_2$ 成分に対して働く力) $Q_{22}=P_0(\omega) \cos \omega t$ この  $P_0(\omega) \cos \omega t$  はエンジンより本体に加わる強制振動力を意味する。 以上に定義された T,U,F, $Q_{22}$ を次の Lagrange 方程式に代入する。

140



$$\frac{d}{dt} \left( \frac{\partial T}{\partial \dot{q}_{\kappa}} \right) - \frac{\partial T}{\partial q_{\kappa}} + \frac{\partial U}{\partial \dot{q}_{\kappa}} + \frac{\partial F}{\partial q_{\kappa}} = Q_{\kappa}$$

$$(q_{\kappa} i 定義された各々の変数をさす)$$
図-1の振動系の運動方程式は,
$$M_{1} \ddot{Z}_{1} - c(\dot{Z}_{2} + l_{x2}\dot{\theta} - l_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - l_{x1}\dot{\varphi} + l_{y1}\dot{\psi})$$

$$- c(\dot{Z}_{2} + m_{x2}\dot{\theta} - m_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - m_{x1}\dot{\varphi} + m_{y1}\dot{\psi})$$

$$- c(\dot{Z}_{2} + n_{x2}\dot{\theta} - n_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - n_{x1}\dot{\varphi} + n_{y1}\dot{\psi})$$

$$+ k_{0}(Z_{1} + \ddot{o}_{x}\varphi - \ddot{o}_{y}\psi)$$

$$-k(Z_{2}+l_{x2}\theta-l_{y2}\eta-Z_{1}-l_{x1}\varphi+l_{y1}\psi)$$
  
-k(Z\_{2}+m\_{x2}\theta-m\_{y2}\eta-Z\_{1}-m\_{x1}\varphi+m\_{y1}\psi)  
-k(Z\_{2}+n\_{x2}\theta-n\_{y2}\eta-Z\_{1}-n\_{x1}\varphi+n\_{y1}\psi)  
=0

$$M_{2} \ddot{Z}_{2} + c(\dot{Z}_{2} + l_{x2}\dot{\theta} - l_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - l_{x1}\dot{\varphi} + l_{y1}\dot{\psi}) + c(\dot{Z}_{2} + m_{x2}\dot{\theta} - m_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - m_{x1}\dot{\varphi} + m_{y1}\dot{\psi}) + c(\dot{Z}_{2} + n_{x2}\dot{\theta} - n_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - n_{x1}\dot{\varphi} + n_{y1}\dot{\psi}) + k(Z_{2} + l_{x2}\theta - l_{y2}\eta - Z_{1} - l_{x1}\varphi + l_{y1}\psi) + k(Z_{2} + m_{x2}\theta - m_{y2}\eta - Z_{1} - m_{x1}\varphi + m_{y1}\psi) + k(Z_{2} + n_{x2}\theta - n_{y2}\eta - Z_{1} - n_{x1}\varphi + n_{y1}\psi) = P_{0}(\omega) \cos \omega t$$

$$\begin{aligned} I_{x_{1}} \ddot{\varphi} - l_{x_{1}} c \left( \dot{Z}_{2} + l_{x_{2}} \dot{\theta} - l_{y_{2}} \dot{\eta} - Z_{1} - l_{x_{1}} \dot{\varphi} + l_{y_{1}} \dot{\psi} \right) \\ &- m_{x_{1}} c \left( \dot{Z}_{2} + m_{x_{2}} \dot{\theta} - m_{y_{2}} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - m_{x_{1}} \dot{\varphi} + m_{y_{1}} \dot{\psi} \right) \\ &- n_{x_{1}} c \left( \dot{Z}_{2} + n_{x_{2}} \dot{\theta} - n_{y_{2}} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - n_{x_{1}} \dot{\varphi} + n_{y_{1}} \dot{\psi} \right) \\ &+ \bar{o}_{x} k_{0} \left( Z_{1} + \bar{o}_{x} \varphi - \bar{o}_{y} \psi \right) \\ &- l_{x_{1}} k \left( Z_{1} + l_{x_{2}} \theta - l_{y_{2}} \eta - Z_{1} - l_{x_{1}} \varphi + l_{y_{1}} \psi \right) \\ &- m_{x_{1}} k \left( Z_{2} + m_{x_{2}} \theta - m_{y_{2}} \eta - Z_{1} - m_{x_{1}} \varphi + m_{y_{1}} \psi \right) \\ &- n_{x_{1}} k \left( Z_{2} + n_{x_{2}} \theta - n_{y_{2}} \eta - Z_{1} - n_{x_{1}} \varphi + n_{y_{1}} \psi \right) \\ &= 0 \end{aligned}$$

$$I_{x1}\dot{\psi} + l_{y1}c(\dot{Z}_{2} + l_{x2}\dot{\theta} - l_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - l_{x1}\dot{\varphi} + l_{y1}\dot{\psi}) + m_{y1}c(\dot{Z}_{2} + m_{x2}\dot{\theta} - m_{y2}\eta - \dot{Z}_{1} - m_{x1}\dot{\varphi} + m_{y1}\dot{\psi}) + n_{y1}c(\dot{Z}_{2} + n_{x2}\dot{\theta} - n_{y2}\dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - n_{x1}\dot{\varphi} + n_{y1}\dot{\psi}) - \bar{O}x k_{0}(Z_{1} + \bar{O}_{x}\varphi - \bar{O}_{y}\psi) + l_{y1}k(Z_{2} + l_{x2}\theta - l_{y2}\eta - Z_{1} - l_{x1}\varphi - l_{y1}\psi) + m_{y1}k(Z_{2} + m_{x2}\theta - m_{y2}\eta - Z_{1} - m_{x1}\varphi - m_{y1}\psi) + n_{y1}k(Z_{2} + n_{x2}\theta - n_{y2}\eta - Z_{1} - n_{x1}\varphi - n_{y1}\varphi) = O$$

$$\begin{split} I_{x2} \ddot{\theta} + l_{x2} c (\dot{Z}_{2} + l_{x2} \dot{\theta} - l_{y2} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - l_{x1} \dot{\varphi} + l_{y1} \dot{\psi}) \\ &+ m_{x2} c (\dot{Z}_{2} + m_{x2} \dot{\theta} - m_{y2} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - m_{x1} \dot{\varphi} + m_{y1} \dot{\psi}) \\ &+ n_{x2} c (\dot{Z}_{2} + m_{x2} \dot{\theta} - n_{y2} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - n_{x1} \dot{\varphi} + n_{y1} \dot{\psi}) \\ &+ l_{x2} k (Z_{2} + l_{x2} \theta - l_{y2} \eta - Z_{1} - l_{x1} \varphi + l_{y1} \psi) \\ &+ m_{x2} k (Z_{2} + m_{x2} \theta - m_{y2} \eta - Z_{1} - m_{x1} \varphi + m_{y1} \psi) \\ &+ n_{x2} k (Z_{2} + m_{x2} \theta - m_{y2} \eta - Z_{1} - n_{x1} \varphi + n_{y1} \psi) \\ &= 0 \\ I_{x2} \ddot{\eta} - l_{y2} c (\dot{Z}_{2} + l_{x2} \dot{\theta} - l_{y2} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - l_{x1} \dot{\varphi} + l_{y1} \dot{\psi}) \\ &- m_{y2} c (\dot{Z}_{2} + m_{x2} \dot{\theta} - m_{y2} \dot{\eta} - \dot{Z}_{1} - m_{x1} \dot{\varphi} + m_{y1} \dot{\psi}) \\ &- l_{y2} k (Z_{2} + l_{x2} \dot{\theta} - l_{y2} \eta - Z_{1} - l_{x1} \dot{\varphi} + l_{y1} \psi) \end{split}$$

$$-m_{y2}c(Z_{2}+m_{x2}\theta-m_{y2}\eta-Z_{1}-m_{x1}\varphi+m_{y1}\psi)$$
  

$$-n_{y2}c(\dot{Z}_{2}+n_{x2}\dot{\theta}-n_{y2}\dot{\eta}-\dot{Z}_{1}-n_{x1}\dot{\varphi}+n_{y1}\dot{\psi})$$
  

$$-l_{y2}k(Z_{2}+l_{x2}\theta-l_{y2}\eta-Z_{1}-l_{x1}\varphi+l_{y1}\psi)$$
  

$$-m_{y2}k(Z_{2}+m_{x2}\theta-m_{y2}\eta-Z_{1}-m_{x1}\varphi+m_{y1}\psi)$$
  

$$-n_{y2}k(Z_{2}+n_{x2}\theta-n_{y2}\eta-Z_{1}-n_{x1}\varphi+n_{y1}\psi)$$
  

$$=0$$

以上の運動方程式を解くと、強制振動力  $P_{o}(\omega)cos\omega t$  による各変位、回転角のふるまいの式 が得られる。

$$Z_{1} = A_{1}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{1})$$

$$Z_{2} = A_{2}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{2})$$

$$\varphi = A_{3}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{3})$$

$$\phi = A_{4}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{4})$$

$$\theta = A_{5}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{5})$$

$$\eta = A_{6}(\omega) P_{0}(\omega) \cos(\omega t - \delta_{6})$$
(1)

上式を用いて、ハンドルの重心位置から離れた測定点の理論値と実測値が比較され、強制振動 力の推定がなされる。なお、この様な回転角を変数として組み入れた解析には、理論の検討のた めに前後ハンドル2箇所の実測値を必要とする。つまり(1)式を用いた解析では

前ハンドル値  $Z_{J}=Z_{1}+p_{x}\varphi-p_{y}\psi$ 

後ハンドル値  $Z_r = Z_1 + q_x \varphi - q_y \psi$ 

と与えられ、両者の値が理論式を通して説明され得るかどうかが吟味のポイントとなる。

以上の理論展開の上で以下の解析を行なった。

解析-1.前後ハンドル測定値より各々逆算される強制振動力の Po(ω) 比較

解析-2. 前(後)ハンドル測定値より得た強制振動力から推定される後(前)ハンドル加速度 値と後(前)ハンドル測定値の比較。

解析-3. 理論式より得られる強制振動力 Po とハンドル重心の変位の比を用いてチェィンソーの防振性能についての考察。

■ 実験方法

1. チェインソーの諸元

今回測定した, チェインソーは 西ドイツ・S社の STIHL 041 AVで あり, それぞれ使用期間の異なる4台のものである。(表-1参照)

chainsaw	1	2	3	4				
type	STIHL041AV	STIHL041AV	STIHL041AV	STIHL041AV-E				
number	2710008	3157542	8012762	8608477				
exhaust volume (cm <sup>8</sup> )	61	61	61	61				
the time of purchasing	March '70	March '74	March '72	March '76				
total mass (kg·s²/cm)	0.00855	0.00881	0.00902	0.00945				
handle mass (kg·s²/cm)	0.000735	0.000648	0.000706	0.000797				
used condition	training for student	felling & bucking in Ashiu Kyoto Univercity forest						

TABLE 1 Specification of chainsaws

#### 2. 振動加速度測定

振動測定の場合, 懸架方法によって測定値が変化するわけであるが, 今までの経験より, 測定 対象物とこの懸架媒介物による固有振動数が測定対象に大きく影響しない限り, 任意で既知のか なり小さい弾性抵抗係数をもつ媒介物で十分であると判断される。また, この場合, 懸架支持物 にはできるだけ重く, その固有振動数が測定対象周波数域をはるかに越えるものが適する。以上 の条件に, 制約内で最大限適する様に, スチール製脚立で支持, 弾性抵抗係数が, 0.185kg/cm のスプリングによってチェィンソーを懸架して測定した。

次に、測定方向については、スプリングの横方向の弾性が未知であったのと、各方向の測定値

を独立して比較するという目的から,スプリングの圧縮方向に測定方向を決めて,各方向の測定を図―2に示すような状態で行なった。

なお,測定についての詳細な事項は以下の通りである。

1. 振動加速度計設置部位:前後ハンドルの把持部,各1箇所

2. エンジン回転数:空転, 2500 rpm ~ 7500 rpmまで500 rpm 毎

3. 測定値について:各回転数の周波数成分にあたる加速度値が, その回転数の最大値となっている事からこの値を測定値とした。



Fig. 2. Suspended condition

4. 測定機器:図-3にその測定セットを示した。



Ⅳ結果と考察

まず,4台のチェインソーの上下,前後,左右,3方向について振動加速度値の測定結果を 表-2に示す。

この測定結果と前述した6自由度系の振動モデルを用いて以下に考察を行なう。

考察-1:解析-1の手法を用いて,前後ハンドル測定値を使って本体にエンジンから加えら れた強制振動力を3方向毎に求めた。ここでは他のチェインソーの内,典形的なNa2のチェイン ソーのグラフを示し考察する。(図-4参照)上下,前後方向の振動力の特性は共に,回転数 が増大するにつれ,その振動力振幅は大きくなっており,6500rpmあたりでやや頭打ちになって いる。これはエンジンの軸出力と傾向が似ている。S社041 AVはエンジンのピストンの往復運 動方向が測定方向の前後方向にあたっており,またコネクティングロッドは上下,前後方向によ って決まる平面上を運動する。従って,上下,前後方向の振動力は,エンジンのピストン運動に 支配されたものとなっていると言えよう。一方,左右方向の振動力は,3000~3500rpm付近に 最大値を持ち,6000rpmあたりでは小さな振動力振幅となり,さらに回転数が増すと,やや大き

		chainsaw-1 (2710008)		chainsaw-2 (3157542)		chainsaw-3 (8012762)		chainsaw-4 (8608477)	
component		fore handle	after handle	fore handle	after handle	fore handle	after handle	fore handle	after handle
	r.p.m.	accei. (g)	accel. (g)	accel. (g)	accel. (g)	accel. (g)	accel. (g)	accel. (g)	accer.(g)
VERTICAL	2,500	1.31	4.10	2.31	5.52	1.62	4.25	1.38	1.31
	3,000	1.62	6.43	3.31	8.16	1.64	5.94	0.583	6.58
	3,500	1.55	6.28	2.42	9.03	1.28	3.26	3.32	9.08
AXIS	4,000	2.24	7.56	2.04	4.43	1.10	2.45	2.44	6.28
	4,500	2.04	4.61	1.84	3.29	1.37	2.42	2.14	4.55
I	5,000	2.29	3.34	1.95	3.00	1.50	2.28	1.93	3.92
	5,500	2.54	2.12	2.02	2.70	0.843	0.392	1.70	3.88
	6,000	2.19	2.03	2.09	2.76	0.979	0.714	1.66	9.49
	6,500	2.66	-2.03	1.68	1.69	1.07	1.27	2.49	1.38
	7,000	2.24	1.83	2.18	1.17	2.79	2.23	3.90	2.53
	7,500	2.76	1.96	2.64	1.13	3.35	3.01	2.89	3.01
	2,500	0.584	1.36	2.44	2.96	1.34	1.32	1.73	1.39
	3,000	2.55	1.69	2.80	1.37	1.31	1.04	1.08	1.77
HORIZONTAL	3, 500	2.64	1.29	2.25	2.55	1.63	1.18	1.85	2.05
AXIS	4,000	3.10	0.927	1.77	3.17	1.52	1.01	2.05	1.81
	4,500	3.72	0.481	2.36	2.14	1.94	0.653	2.05	1.42
	5,000	4.58	1.18	1.25	2.24	2.10	0.624	2.61	1.19
	5,500	5.21	3.44	1.08	1.66	2.44	0.324	1.69	1.28
	6,000	2.64	3.18	0.745	1.43	3.10	0.563	3.25	2.67
	6,500	2.55	2.55	0.641	1.48	4.28	1.38	4.59	2.55
	7,000	1.19	3.25	0.807	1.59	4.81	1.78	6.48	3.15
	7,500	1.05	2.47	0.845		6.48	3.31	4.19	2.49
AXIAL AXIS	2,500	0.413	0.828	0.107	0.292	0.491	1.65	0.26	0.768
	3,000	0.550	3.25	0.289	2.23	1.01	4.00	0.66	2.37
	3,500	2.38	4.25	1.45	4.04	1.15	3.03	1.84	4.68
	4,000	2.82	4.06	1.35	4.38	2.14	0.598	4.42	4.22
	4,500	3.35	1.25	2.55	4.58	2.03	0.695	2.79	1.95
	5,000	4.85	0.817	2.40	2.09	2.49	0.249	2.54	1.60
8	5,500	2.54	0.798	2.09	1.38	2.29	0.194	2.32	1.40
	6,000	2.32	0.325	1.22	1.63	0.862	0.527	2.96	1.55
f I	6,500	1.15	0.382	2.22	0.883	0.604	0.885	3.76	1.53
	7,000	1.00	0.414	1.84	0.760	1.20	3.82	1.98	1.40
	7,500	0.990	2.10	1.55	1.64	2.04	5.21	1.41	2.35

 $(1g=980 \text{ cm/s}^2)$ 

TABLE-2

Vibration acceleration (STIHL041AV)



Fig. 4. Compelling power of vibration at c. g. of body (calculated from measured accelerations by vibration model) X-engine revolution Y-compelling power of vibration

な値になっている。左右方向の振動力は上下,前後方向と異なったものに起因しているようだ, 考えられるものとしては,チェインバーの共振が掲げられる。次に,前,後ハンドル部の測定値 から逆算されたこれらの振動力は,一台のチェインソーの各方向について傾向は似ているが,絶 対値にかなりの差がある。これは,振動力を推定するのに用いた振動モデルが現実を正確には反 映していない事による。他のNo 1, No 3, No 4のチェインソーについても傾向としては同じであ った。

考察-2:解析-2の手法を用いて測定値を吟味する。同様にNa2のチェインソーでデータを 用いて考察する。(図-5参照)前・後ハンドルの測定値と、これらよりモデルを用いて計算し た他の測定部位の推定値を比較して見る。上下方向の後ハンドル測定値と、前ハンドル測定値か ら計算した後ハンドル推定値では3000~6000rpmで見られる様にモデルの効果が見られる。つま り、ここでは前ハンドル測定値に対する後ハンドルの推定値が、後ハンドルの測定値に近似され る傾向にあり、6自由度系のモデルが、ある程度の意味を持っている事が示されている。しか し、この傾向は、全ての方向について、全ての周波数域について言える様な一般性を持っていな い。つまり、前、後ハンドル個々の測定値の特性をモデルで変換し得ていない。この点について はモデルの検討という今後の課題として保留する。

次に,前,後ハンドル個々の測定値の特性を整理すると、4台のチェインソーについて共通し て次の事が言える。上下方向について,前ハンドルの値は後ハンドルに比べて小さいが7000rpm



2-converted accelerations at fore handle 3-measured accelerations from after handle 4-converted accelerations from fore handle to after handle X-engine revolution Y-acceleration,

あたりで増大する。一方,後ハンドル の値は 3500rpm あたりに 6 9 以上の paek 値を持つ。 これは、防振構造の 共振が後 ハンドル部に 現われて いる 事による。前後方向について, Na 2の 場合、顕著な傾向はないが、その他の チェインソーの 場合, 7000rpm あた りに59以上の peak 値を持ち,後ハ ンドルでも同じ回転数あたりに小さな peak を持っている。 左右方向につい て, 前ハンドルの値は4500~5000rpm あたりにpaekを持ち,後ハンドルでは 3500rpmあたりに49以上の peak 値 を持ち, 7500 rpm あたりにも 小さな peak を持つ。この 3500rpm あたりの peakは防振ハンドルの共振による。

考察-3:解析-3の手法を用いて 防振性能を示す振動力,ハンドル重 心変位の比をNo2のチェインソーにつ いて考察する。(図-6参照)2自由 度系のモデルでの考察と同様,上下, 前後方向の防振性能に比べて,左右方 向が悪く,6500rpmあたり(No.2は55 00rpm)にも共振があり,常用回転数



Fig. 6. Performance of anti-vibration The ratio of amplitude of vibration (Y) at handle (c.g.) to compelling power of vibration at body (c.g.) within operating revolutions (X).

域に大きな加速度値を持つ 原因となっている。 4 台の防振性能を比較しても, 前回の結果と同 様,型番の古いものほど,性能は悪くなっていた。結局,回転角を含めたモデルに,防振性能と して,新たな傾向は見られなかった。

# V ま と め

本研究を通して得られた結論を以下に整理すると、

1. 6自由度の振動モデルによってハンドルの前,後部の測定値をある程度,近似する事ができた。

2. ハンドル重心変位の防振性については、回転角による影響は少なく、本体変位との関係に 大きく依存している。

3. ハンドル把持部の防振性については、回転角による影響があった。

以上の結論を踏まえて,以下に今後の課題を整理すると,

1. 6自由度の振動モデルを用いて測定値をシュミレートしようとしたが、今一つ妥当なもの になっていない。この点を、防振材の粘弾性抵抗係数をより吟味し、周波数に対して変動する係 数としてとらえていくつもりである。

2. 回転角によって増減するハンドル把持部の振動に対してより有効な防振性をもつ防振構造 をハンドルバランスの吟味より模索していきたい。

最後に,チェインソーを御貸しいただいた,京都大学芦生演習林山本俊明林長,ならびに測定 場所を提供していただいた,京都大学上賀茂試験地の諸氏に感謝の意を表します。

# 引用文献

1) 後藤純一・滝本義彦: Chain Saw の防振性能の評価法,その1,第88回日林講(1977)

2) 後藤純一・滝本義彦: Chain Saw の防振性能の評価法, その2, 第89回日林講 (1978)

3) 亘野 厚:機械力学,共立全書,86,54~75

4) 後 秀樹:チェインソーの防振構造,京大農卒業論文(1978)

## Résumé

There are many hand-hold tools that are improved on the vibration in Japan. In the case of CHAIN-SAW, one is the ROTARY-CHAIN-SAW that is driven by ROTARY engine, one is the PNEUMATIC-CHAIN-SAW that is driven by air-compressor, etc. But, we cannot decide which is better, because we have not a fixed way to evaluate the CHAIN-SAW.

This time, we measured four CHAIN-SAW(STIHL-041AV) on the vibration, and got many data, (TABLE-2). And then, we compared those data with the calculated one that was gotten from six-degree-freedom anti-vibration system. After that, we could indicate how to isolate the vibration of CHAIN-SAW.

Many types of AV system are used of the CHAIN-SAW, but this report is only about THREE-POINTS SUSPENDED AV system. On the situation of measurement, each CHAIN-SAW is hanged down by a spring, (modulus of elasticity is 0.185 kg/cm) and

this set is suspended by a steal stepladder.

We have simulated AV system of CHAIN-SAW to the two-degree freedom system till now. These two degree freedom are the fluctuations of the center of gravity (c. g.) about the handle and the body of CHAIN-SAW. But we cannot simulate the vibration of CHAIN-SAW to the two degree freedom system, since the handle and the body of CHAIN-SAW are not mass points. So in this study, we simulated it to the six degree freedom system added each two rotary angles around two centers of gravity. (FIG. 1)

By this study, we reached the following conclusions. The relation between fore and after handle obtained from the measurements was obedient to the simulation to a certain extent. (FIG. 5)

Then the AV capacity at c. g. of the handle obeid only the fluctuations of c. g., but the AV capacity at the gripped points obeid the fluctuations and the rotary angles. (FIG. 6)

Finally, we shall investigate this simulation for the modulus of elasticity and the coffiecient of viscosity on AV system. Then on the improvement of AV system, we may isolate the vibration at the gripped point by means of the rotary angles.